

日常生活を題材とした対話的な学びの中で 児童の考えを広げることをめざした授業実践

棕尾 宗大郎(長崎大学大学院教育学研究科)
呉屋 博(長崎大学大学院教育学研究科)
篠崎 信彦(長崎大学大学院教育学研究科)
倉田 伸(長崎大学大学院教育学研究科)

I 序論

従来から、授業において学習内容と児童の日常生活をつなげることに
より、児童が多様な価値観を得ることが必要であると言われている(文
科省 2017)。平成 29 年告示の学習指導要領では、「生きる力」の育成
に必要な資質・能力として 3 つの柱を示し、この資質・能力を育むため
「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の必要性を示し
ている(文部科学省 2017)。その中で、「対話的な学び」は「子供同士
の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考える
こと等を通じ、自己の考えを広げ深める」と明記されている。このこと
により、対話的な学びについて、児童が学習内容と日常生活とのつな
がりを感じると共に、多様な人や物との対話を通して自己の考えを広げ深
める視点で捉えることが必要である。

本実践研究では、初等教育において児童が学習内容と日常生活とのつ
ながりを感じながら、多様な人との対話を通して、自己の考えを広げる
ことを目指し、児童にとって身近な日常生活を題材とした対話的な学び
を取り入れた授業を実践した。今回は、大学院 1 年前期で行なった実践
(以下、実践 1)、大学院 1 年後期で行なった実践(以下、実践 2)、大
学院 2 年で行なった実践(以下、実践 3)について報告する。

II 実践 1

II - I 実践 1 のねらい

実践 1 のねらいは、A 小学校における対話的な学びの実態把握と児童
の日常生活に関する実態把握を行い、身近な題材を扱った授業を実践す
ることとした。

II - II 社会科の授業実践

社会科の授業実践の流れを次ページの表 1 に示す。

表 1 社会科の授業実践の流れ

流れ	学習活動
導入	<ul style="list-style-type: none"> ◆前時の学習を振り返る。 ◆<u>買い物調査カード</u>の結果を黒板に掲示する。
展開	<ul style="list-style-type: none"> ◆<u>買い物調査カード</u>の結果から気づきやわかることを述べる。 ◆<u>家庭の買い物の様子</u>や結果を伝え合い、買い物の実態を捉える。 ◆学習問題を立てる 「なぜスーパーでは多くの人が買い物をするのだろうか」
まとめ	◆スーパーの良さについて疑問や視点を広げる。

A 小学校では校区の広さから、児童の生活環境に違いがあるという実態を踏まえ、「児童の保護者が普段買い物に行くお店」という日常生活を題材とした。

授業では、保護者が買い物に行く場所やその様子についての事前調査を実施した。その内容について話し合い、共通点や相違点について考えることを通して「なぜスーパーで多くの人が買い物をするのか」という学習問題を立てた。事前調査の結果をお店の種類ごとに色分けし視覚的に見えやすくしたことで、買い物に行った時の様子などについて、他者と比較したり、共通点を見出したりする様子が見られた。また、お店の種類だけでなく買い物の様子や目的などについても話しており、各児童の日常生活に関する視点が広がっていく様子が見られた。一方で、買い物の体験の少なさなどにより、自分の調査内容を伝えられず、意見の強い児童の考えに偏る様子も見られた。このことから、児童の実態について表面的な部分しか理解できていなかったという課題が見られた。

Ⅱ－Ⅲ 国語科の授業実践

国語科の授業実践の流れを次ページの表 2 に示す。児童が目にするおたよりの中でも日常的に手に取ることがある「ほけんだより」を題材とした。この「ほけんだより」は A 小学校の養護教諭が毎月発行している文書である。授業では、実際に発行されているほけんだよりと自作したほけんだよりを見比べ、伝えたい内容や伝え方の工夫について考えた。また、児童の生活実態に即し、係活動の内容をおたよりにし、クラスの友だちに伝えることを単元の目標とした。

授業では、発行しているほけんだよりについて、以前書かれていた内容や読んだ体験について語る様子が見られた。このことから、「ほけんだより」を題材とした授業では、児童が自身の体験を基に対話を行うこ

表 2 国語科の授業実践の流れ

流れ	学習活動
導入	<ul style="list-style-type: none"> ◆<u>養護教諭の保健だより</u>を見て、伝えたいことや伝え方について考える。 ◆教師が作成した保健だよりと比べて、内容や伝え方の違いを捉える。
展開	<ul style="list-style-type: none"> ◆「2つのほけんだより」を読み、おたよりには伝えたい内容と伝え方の工夫が必要であることを掴む。 ◆本単元の大めあてを立てる。 「〇〇会社だよりをつくろう」
まとめ	◆次時への見通しをもつ

とを通して学びが行われていたことがわかる。一方で、ほけんだよりについての疑問を養護教諭本人に尋ねる活動がないため、作成の意図や思いを聞けなかったと語る児童もいた。このことから、題材の扱い方と共に、題材の提示の仕方や題材に関わる人との対話を取り入れた活動が必要であるという課題が得られた。

Ⅲ 実践 2

Ⅲ－Ⅰ 実践 2 のねらい

実践 2 のねらいは、B 小学校の複式学級における児童の日常生活に関する実態把握と、小規模校に見られる「多様な価値観を得る機会の少なさ」(中央教育審議会 2008)という課題の実態把握を行い、その課題解決に向け、授業をデザインし、実践することとした。

Ⅲ－Ⅱ 国語科の授業実践

国語科の授業実践の流れを次ページの表 3 に示す。B 小学校には生きものや自然を管理しており、児童が朝や昼の時間によく遊ぶ「ビオトープ」があり、それを題材とした。授業では、「ビオトープ」を導入で用いて、同音異義語の漢字を使った文章を学校内外の体験を基に考えるようにした。身近な題材を用いたことで、あまり積極的でない児童も自らの体験を発言する様子が見られた。また、日常生活の様子を引き出したことで、「サッカー」「習字」「ゲーム」など児童それぞれの生活に合った文章を作成する様子も見られた。一方で、多様な考えに触れるという課題解決のため、ペアやグループ活動を取り入れ、互いの考えを語り合う活動を取り入れたが、似たような考えをもつ児童同士の班では、児童の考えが広がらないという課題が見られた。このことから、児童に対し

表 3 国語科の授業実践の流れ

流れ	学習活動
導入	◆「ビオトープのかわがキレイだ」の「かわ」の漢字を考え、本時のめあてを立てる。 めあて「漢字の意味に気を付けて、ぴったりの文章を作ろう」
展開	◆教科書の設問を解き、作る文章のイメージを膨らませる。 ◆ペアグループ・中グループの順番に組み、文章を考え伝え合う。 ◆全体で共有する。
まとめ	◆本時の学習を振り返る。 まとめ「同じ音の漢字でも違うものがあり、前後の文や意味の違いを考えて文章を作るとよい」

てさらなる実態把握が必要であると共に、対話を活性化させるための手段として、児童同士だけでなく第三者の意見を新たな視点として活用するという活動も考えられる。

IV 実践 3

IV-Ⅰ 実践 3 のねらい

B 小学校には 1 名で学ぶ 5 年生児童が在籍している。この児童に対しどのように本実践を行えばよいか疑問に感じたため、対象とした。そこで実践 3 のねらいは、児童の考えを広げることとし、日常生活を題材とした対話的な学びを取り入れた授業をデザインし、実践した。

IV-Ⅱ 道徳の授業実践 I

道徳の授業実践 I の流れを次ページの表 4 に示す。児童が日常的に保護者の小型携帯端末と一緒に使用し、様々な人と SNS のテキストコミュニケーションを行っているという実態から、「児童の日常生活におけるメディア活用およびスマートフォンのような片手サイズのモバイル携帯端末(以下、小型携帯端末)のテキストコミュニケーション場面」という日常生活の題材を取り入れた授業を行った。その教材として、書き込み型情報モラル教育教材である「SNS ノートながさき」を用いることにした。ただし、SNS ノートながさきは複数人で直接対話しながら行うことを前提としたものであるため、学級に 1 人しかいない状況では使用が困難である。そのため、B 小学校の実態に合わせた授業をデザインした。授業では、同じ言葉でも感じ方が人によって違うことを掴む際、教師が学習者の一人として意見を提示した。また、SNS 上のテキストコミュニ

表 4 道徳の授業実践 I の流れ

流れ	学習活動
導入	<ul style="list-style-type: none"> ◆5つの話し言葉から、自分が言われて一番いやな言葉を考える。 ◆教師の考えも提示し、言葉の感じ方の違いを掴む。 めあて「言われて嫌だと感じる言葉について考えよう」
展開	<ul style="list-style-type: none"> ◆現実とネットの特性の違いを捉え、伝え方の工夫について考える。 補助発問「どうして同じ言葉でも嬉しい時と嫌な時があるのだろうか」 ◆実演活動を行い、非言語的要因が感じ方に影響していることを捉える。
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> ◆日常のメディア活用での関わり方について考える。 ◆「これも、チェーンメール」を読み、現実とネットのつながりを考える。

ケーションでは非言語的な要因が伝わらないことを捉えることができるようテキストコミュニケーション場面を想定したロールプレイング(以下、実演活動)を行った。

教師が一人の学習者として意見を提示したことで、異なる考えに気づき、多様な視点から考えようとする様子が見られた。また、実演活動により、日常のメディア活用を振り返り、自分の気持ちが上手く相手に伝わらなかった経験を語る場面も見られた。

実践後のインタビューでは、対象児童の「同じ言葉からいろいろ考えられたのが不思議だった。」という感想から、異なる考えへの気づきが見られた。このことから、教師が学習者の一人として考えを提示したことが、児童が異なる視点を得るきっかけになったと考える。また、実演活動により実生活とネット上のやりとりをつなげて考えられるようになったことで、「スタンプなどを加える」「後日、直接会って伝える」等の自分自身が日常で行っているメディア活用と授業の学習内容をつなげて捉えることができたと考える。教諭に対するインタビューでは、「子ども一人では考えが広がらないから、一緒にカードを並べ替えていたのがよかった」と、教師の学習者としての参加が児童の考えの広がりにつながったと考えられる。また、「ロールプレイは子どもにわかりやすくてよい」ことから、実演活動がネット上の特性に対する児童の気づきを容易にしたと考えられる。一方で「子ども同士の横のつながりがない」「教師が何役も出来ない」「人数がいれば、子ども同士の会話から

気付ける」と教師一人と児童一人の授業では、考えが二つしか出ないという課題が見られた。そのため、事前に考えを準備しておき、授業の際に提示するという活動が考えられる。また、「(実演活動で)興味関心を引くだけでは」「少人数学級の良さと課題に対するアプローチが必要」「場の工夫」というインタビュー中のキーワードから、1対1の学習における学習形態や活動パターンを工夫することが課題として得られた。

IV-III 道徳の授業実践Ⅱ

道徳の授業実践Ⅱの流れを次ページの表5に示す。実践3の授業実践Ⅰと同様、「児童の日常生活におけるメディア活用および小型携帯端末のテキストコミュニケーション場面」を題材として扱った。また、実践3の道徳の授業実践Ⅰで得た課題に対し、他学年児童の考えを事前に準備し、授業の際に提示する活動を取り入れた。また、学習形態や活動のパターンの課題に対して、他の教職員や外部の人へのインタビュー活動を取り入れ、授業を実践した。授業では、SNS上のテキストコミュニケーション場面に対する気持ちを選び、授業者の考えと比較する。次の場面では他学年児童の考えと比較し、共通点や相違点を見出す。感じ方に違いがあることを捉え、ネット上の関わりにおける注意点を他の教職員や外部の人にインタビューし、ネット上の関わり方についてまとめる。

実践後、教諭3名へのインタビュー及び児童へのアンケート、ビデオを活用した授業の様子を行った。インタビュー中の「他の人も私とちがう意見をもっていたから自分の考えが広がった」と児童は自分の考えの広がりをつまえていることがわかる。授業中、「この意見はわたしと似てる」「これは全然違う」と自分の考えと他人の考えを比較したり分類したりする様子が見られことから、他学年児童の考えを提示したことが、児童の考えを広げることにつながったのではないかと考える。また、他の教職員や外部の人に対するインタビュー活動の際には、児童がネット上の関わりについて新たな考えに気づく様子が見られた。このことから、インタビュー活動が新たな気づきを促すことにつながると考える。

教諭3名との授業の振り返りでは、「他学年児童の意見が児童の考えが広がるきっかけになっていた」「一人では出ることのない考えがあり、広がる」ことから、他学年児童の考えの提示したことで、児童に多様な視点を与えるという意見が得られた。さらに、「他の人と伝え合う活動は普段できないのでいい」「相手を意識して伝えられていた」という様に、他の教職員や外部の人に対するインタビュー活動が学習形態や活動内容の広がりにつながったと考える。

一方で「実際にテキストコミュニケーションを用いて行ったほうが見

表 5 道徳の授業実践Ⅱの流れ

流れ	学習活動
導入	<ul style="list-style-type: none"> ◆メッセージのやり取り場面①を見て、気持ちを表すカードを選ぶ。 めあて 「相手に自分の気持ちを正しく伝えるにはどうしたらいいか考えよう」
展開	<ul style="list-style-type: none"> ◆メッセージのやり取り場面②に対する自分の考えを、カード教材を用いて発表する。 ◆他学年児童の考えを提示し、自分の考えとの共通点や相違点を捉える。 補助発問 「メッセージを送信するときにはどんなことに気を付けたらいいだろうか」 ◆多様な価値観があることを踏まえ、メッセージのやり取りの際の注意点を考える。 ◆他の教職員や外部の人にメッセージ送受信の際の注意点を伝え、インタビュー活動を行う。
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> ◆ネットの特性を踏まえた相手への伝え方について、本時の学習のまとめを行う。

童も実感がもてると思う」という意見もあり、日常生活により身近にするためにはテキストコミュニケーションツールがインストールされた小型携帯端末のような機器を用いる活動がよりよいと考えられる。

Ⅳ－Ⅳ 実践 3 を振り返って

クラスに児童が一人しかいないという環境では、児童の様子がより深く理解できるという良さを感じると共に、児童との距離感を調整することに難しさを感じた。ほかの人の意見を聞く活動がないため、教師との話し合いのようになってしまうこともあった。発表も席を立たずに伝えられ、声を大きく出さなくても聞こえる距離にいるため、学習形態に不安を感じていた。1対1の授業では児童と一緒にどのような学習を進めていくか、その形式も一緒に考えていくことが必要であると感じた。

また、小規模学校であったB小学校では一人ひとりの児童を深く理解できたと考える。児童の保護者や地域の方と会う機会も多くあり、学校や児童に対する思いや願いを聞くこともできた。そこから児童の日常生活の様子を聞くことも出来たため、このようなつながりが日常生活を題

材とする際には大切だと考える。また、実践 3 では他の教職員の協力を得た。教職員同士の関わり合いが児童の学習の可能性を広げることにもつながると考えた。

V まとめ

本実践研究では、児童の日常生活を題材とした対話的な学びの中で、児童が自身の考えを広げることを目指した授業のデザイン・実践を目的とした。実践 1 では、児童の実態把握を行うことで、日常生活を題材として扱った授業を行うことができた。実践 2 では、日常生活を題材とした学習を行うことで児童が自らの体験から考える活動を行うことができた。実践 3 では、他学年児童の考えを提示したり、他の教職員等へのインタビュー活動を行ったりするなど、日常生活を題材とした学習内容について多様な人と対話する活動を取り入れることで、児童の考えが広がる様子が見られた。

今後は、地域の人や先哲の考えを取り入れた対話的な学びを授業で行っていきたい。また、対話的な学びは各教科等で行われるべきものであると考える。今回実践した教科等以外の教科でも実践を重ねていきたい。

参考文献

- 文部科学省(2017)小学校学習指導要領解説総則編 pp.1-4、76-77
文部科学省(2017)小学校学習指導要領解説編 特別の教科 道徳編
pp.48-49、97-98
中央教育審議会(2008)学校規模によるメリット・デメリット(例)
長崎県教育委員会(2019)SNS ノートながさき 3 pp.1-3、6-7